
赤い爪

あめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い爪

【Zコード】

N7953A

【作者名】

あめ

【あらすじ】

深夜一時の眩しい赤い爪。輝くネオンと静かな夜に、突然の来訪者。仕事のことなんて、気付いたら忘れてた。

「だからね、そう、疲れちゃったのよ」

深夜にいきなりインター ホンを押してやつてきた優子は深々と溜め息をついた。

決して広くないアパートの一室で、私は皿を擦りながらコーヒーを沸かしていた。

優子の突飛な行動には慣れっこだし、それを迷惑と感じたこともない。

ただ少し苦い顔をしたのは、優子の手足の爪が真っ赤だったからだ。優子の突飛な行動には慣れっこだし、それを迷惑と感じたこともない。

「ペティキュアよ、ペティキュア」

コーヒーを沸かし終え、優子のもとに持つていったとき私が優子の手足を見ているのに気付いたのか、優子が明るく口を開いた。

キラキラと輝いているそれは、センスがいいのか悪いのか私には分からなかつた。

「それでね、聞いてよ」

優子はコーヒーを一口啜り、改まって私に向き直つた。

「ひーくんがね、また浮氣したの」

思い切り殴つてやればよかつた、と優子は口惜しそうに舌打ちした。

そんな優子に適当に返事をしながら私は時計を見た。

午前一時。

私も優子も仕事がある。

だけど今の優子の中に仕事といつ文字はないなど、私は諦めて優子の話に耳を傾けることにした。

「もう別れちやおつかな」

優子は弱々しく咳いた。

ひーくんというのは、優子の恋人で、もう一年半の付き合いになる。

「浮氣されたびに聞くけど、その言葉

私が呆れたように言うと優子がいたずらっぽく微笑んだ。

「だあつて、ひーくんの顔見ると許しちゃうんだもん」

結局今回も許すんでしょ、と優子の足の爪を見ながら私は言った。

暗い夜に光るネオンみたいだと私は思う。

きらびやかで、着飾つていて、眩しいのに温かい。

「聞いて。ひーくんね、この前転んだときに膝怪我しちゃって、傷
口から血が出ちゃって、

なんだからあたしも赤いものが欲しいなあつて思つたから、赤いペ
ディキュア塗つてみた」優子は、時々理解できない発言をする。
私はそういうとき反応に困るから、あー、とか、うん、とか適当に
相槌を打つていた。

結局のところ、心地がいいのだ。

深夜に押しかけてくる優子の迷惑な行動も、眩しい赤い爪も。

私は仕事のことを忘れて優子の話を楽しげに聞いた。

気付いたら寝っていて、朝優子の爪を見ると、朝日にかすんで爪の赤
は何だか薄くなっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7953a/>

赤い爪

2010年10月10日23時47分発行